はこの音楽の世界である。その音楽的舞には筆をもつてはあらわし得ない詩の世界が画かれてあるのだ。寄せては返す波、月影は砕け散る波のしぶきに千々と輝き、あらわれ出でた妖精は波の間に間に舞い戯れる。ある人はこの乱を見て「ありあまる事のよさ」を歎じた。将にありあまるばかりの陶酔さである。又ありあまるばかりの芽出たさである。なるが故に慶祝の能、年納めの能にはよくこの乱が舞われもする。

観世流では御披きには必ず笛方は森田流になるが、今日は御披きでもなく笛方も一噌流である。従つてその型のくばりも変つてくる。又普通の猩々の場合だとシテは扇をつぼめてあらわれるが、乱の時は始めから扇をひらいた侭で幕を出る。昔ならばこの扇をひらいているかいないかで、乱になるか否かが決められ、囃子方にその心構えが必要であつたわけである。囃子方の心構えと云えば、今の乱は観世流は六段に舞うと決つているが、昔はその時の都合で何段にでもなつた。そしてその段の数を取り決める合図となるのが「曲（キヨク）」であつた。「曲」があつて後一段と決つているからである。何れにせよ今日は初段まで破掛リ中之舞で末段は中之舞に復さず「乱留メ」となる。

又最近では乱と云えば猩々乱をさすが、驚の能にもあつて、猩々のそれが赤づくめの扮装であるのに対し白づくめの扮装、従つてその位もおよそ猩々とは対照をなしている。

百々裏話（10）

—花伝私注　その四—

おもてあきら

○かさは一さいにわたるぎ也

問。能に位の差別を知る事、いかむ。

答。これ、目利の眼には易く見ゆるなり。凡そ位の上がるとは、能の重々の事なれども、ふしぎに十ばかりの能者にも、この位をのれと上がれる風体あり。……まづ稽古の劫入て位のあらんは、常の事也。又生得の位とはたけ也。かさと申は別の物也。おほく、人、たけとかさとをおなじやうにおもふ也。かさと申物は、もの〳〵しくいきをひのあるかたち也。又云、かさは一さいにわたるぎ也。くらる、たけはべちの物也……（花伝第三問答条々第六問。）

この段は、風姿花伝の中でも、世阿弥の能楽論の中でも主要な位置を占めている位・長（たけ）・嵩（かさ）等の語について、まとまつた見解が示されている所なので、特に注目されている段である。諸本によつて文句の相違が少々あり、殊に吉田本は甚しく異なつている。しかし吉田本の本文は、特にこの段が、後人の改訂の跡が著るしいので、今の場合問題にしないことにしよう。

33年度予定番組

於観世会館

一月十五日（祭）一時始

神歌　観世静夫
高砂　観世銕之丞
蟬丸　替之形　観世華雪
山姥　白頭　長杖之伝　観世寿夫

二月十四日（金）五時半始

田村　若松宏充
小塩　観世銕之丞

三月十四日（金）五時半始

遊行柳　青柳之舞　観世華雪
船橋　観世静夫

別会　三月廿九日（土）一時始

素謡　小袖曾我　鵜沢雅
養老　水波之伝

さて、右の文中のかさの説明の「かさは一さいにわたるぎなり」について、従来は、かさと言うものは、能ばかりではなく、一切の芸道にわたつて存在するものである。

という解釈がほどこされている。能勢（評釈）野上（花伝書研究）川瀬（注花伝書）小西（口語訳）田中（国文学）の諸権威がみな同様の見解を採つておられるから、ほぼ定説になつている観がある。他に「一切にわたる」を「行き届いた振り」とする見解もあるらしいが（評釈上参照）、これは問題になるまい。

しかし、右の定説？は、よく考えてみるとどうもおかしい。たけ（長）とかさ（嵩）が別のものであることを説明している文であるから「かさは他の諸道にもある」ということばの裏には、「たけは能だけのものだ」という気持が含まれているものと見なければなるまいが、たけは歌道や連歌の方でしきりに使われていた理念を世阿弥が借用したもので、能だけが求めるものではない。また、かさは一切の諸道に存在すると言うことも、簡単には同意できないことのように思われる。第一、他の芸道にあるとか無いとか言うことは、たけとかさとが別のものであることの説明にはほとんど効果があるまい。そんなわけで、私は従来の定説には賛成しないのである。

私見は、ここはかさという言葉に二つの意義があることを説明しているところで、その一つが「物々しく勢のあるかたち」の意、もう一つが「一さいにわたる」という義なのであり、問題の部分は

かさは、一切の風躰にわたり、芸の幅が広いことを意味するのである。

と解したいのである。

先ずかさという語の世阿弥の用例を調べてみると、ここ以外に二か所に見られる。その一つは、花伝第六花修の左の文である。

……かなはぬ所も、功入れば自然々々に叶ふ時分あるべし。去程に、つゐには能にかさもいでき、あかも落ちて……

ここは〝不得手な能は晴れの舞台などでは演ずるな。田舎でやる能の際に稽古せよ。稽古を重ねていくうちに自然に出来るようになろう。そうすれば能にかさが出てくる…〟と言う所であるから、ここのかさは、能の様々の風躰の積み重なつて生ずるものであり、芸の幅と見る事が可能であろう。もう一つの用例は、申楽談儀の金剛権守の芸風をのべた

金剛はかさ有しして也。あまりにかさ過て過重なる所ありし者也……

である。これは「物々しく勢のあるかたち」の意のかさにぴつたりする用例であるが、それに続く文の中に

金剛は何をもせし者也。

とあることは見逃せない。何をもせし者とはどんな能でも演じこなした者の意であろう。つまり金剛権守は「物々しく勢のある」してでもあつたでもあり、「一切にわたる」してでもあつた

隅田川　山口幸徳
船弁慶　観世銕之丞
重前後之替

四月十一日（金）五時半始
俊寛　鵜沢雅
百万　観世銕之丞
法楽之舞

五月九日（金）五時半始
大原御幸　観世華雪
法皇
車僧　山口幸徳

六月十三日（金）五時半始
巴　山本真義
女郎花　観世銕之丞

九月十二日（金）四時半始
小督　山口幸徳
恐之舞
夕顔　観世寿夫
山端之出
法味之伝
鉄輪　観世静夫

わけで、かさの両面を具備したしてであつたと思われるのである。以上二ヶ所の世阿弥の用例は、ともに私見を支持するものと信ずる。

「一切にわたる」に〝一切の風躰にわたる〟と、風躰を補つて解することに疑念の生ずるおそれもあるが、

○物狂の品々多ければ、この一道に得たらん達者は十方へわたるべし。

○一むきの風躰ばかりを得て、十躰にわたるところをしらでよその風躰を嫌ふ也。

○風躰かた木はめんめん各々なれども、面白き所はいづれにもわたるべし。

○和州へも江州へも、若は田楽の風躰までも、人の好み望みによりて、いづれにもわたる上手なるべし(以上みな風姿花伝)

などの「わたる」の用例を考え合わせると、極めて自然な解釈であることが知られよう。また「ぎ也」には、

○破は又それを知して注する釈の義なり。

○急と申すは、あげくの義なり(以上花鏡)

などの用例があつて、義は意義であり「何々の意味である」と解するのが普通である。

以上、世阿弥の言葉の使い方から見ても、私説の方が自然であり、他の諸道にも存在するというような、少々飛躍した従来の説は訂正すべきであろうと信じている。

ところで、かさ(嵩)という言葉は世阿弥以前の歌論書・連歌論書にも散見しており、それらの用法も私説を支持するもののようである。「後鳥羽院御口伝」の女房丹決の歌を評した所に(岩波文庫中世歌論集二二四頁)

丹波やさしき歌あまたよめり……人の存知よりも、愚意にことによくおぼえき。故摂政は、かくよろしきよし仰くださるゝゆへに、老の後かさあがりたるよし、たび〳〵申されき。

とあるが、ここのかさも〝老後に上りたる〟とあるから、修練の結果の積み重ねの上に生ずるものと解され〝一切にわたる〟に近い用例と見られる。また二条良基の「九州問答」にも、

……カ様ニ付候ハンニハ、只恐怖シタル計ニテ、嵩ノ上ル事ハアルマジキ也

とあるが、この嵩も、恐怖することなく、数々の連歌を詠みこなしていくうちに自ら上つてくるもののように意識されていたと解し得るから、世阿弥の使い方と極めて近い。恐らく歌論のかさが連歌論の嵩に継承され、連歌論の影響が世阿弥の能楽論にも及んでいるのであろう。

なお、問題にした「かさは一さいにわたるぎ也」に続く「くらゐ、たけはべちの物也」についても、従来は「かさと、位やたけとは別の物である」の意に解しているが、これをかさとは無関係で、「位とたけとは別物である」と解する方が、後の文との接続が良くはないかと、ひそかに考えているが、これはまだ自信が無い。

(32・12・6)

十月四日(土)一時始

錵之丞還暦祝 別会

鶴亀	観世華雪
姥捨	観世錵之丞
	観世寿夫
	観世静夫
	観世元昭
紅葉狩	観世元正
	替之形

十月十日(金)五時半始

梅枝	橋岡久太郎
融	鵜沢雅

十一月十四日(金)五時半始

班女	片山博太郎
	梅若万三郎
	観世錵之丞
三笑	観世華雪

十二月十二日(金)五時半始

松風	観世静夫
枕慈童	観世錵之丞